



デジタル時代の情報教育とこれからの学び

～これからの情報教育と指導のヒント～

GIGA スクール構想による 1 人 1 台端末の整備・定着フェーズを経て、学校現場は今、端末を単なるツールとして使う段階から「探究的・個別最適な学びの質的向上」と「AI 時代の新たな情報活用能力の育成」を目指す本格的な移行期（NEXT GIGA / 教育 DX）を迎えています。

文部科学省および中央教育審議会における最新の審議では、「リアルとデジタルの融合（ベストミックス）」が掲げられています。体験や対面コミュニケーションといった「リアル」の良さと、クラウドによる協働学習や AI 等による個別学習といった「デジタル」の強みを重ね合わせることで、一人ひとりの学びを深めることが求められています。

1 次期学習指導要領に向けた情報教育の再編

2030 年代から順次実施される次期学習指導要領に向けて、小・中・高等学校を通じた情報教育の抜本的な再編・系統化が計画されています。

小学校	総合的な学習の時間に【情報の領域（仮称）】を位置付け タイピングやインターネット検索、簡単なスライド作成といった情報活用の基礎から、AI やプログラミングの基礎、情報モラルまで、発達段階に応じて体系的に学びます。
中学校	技術・家庭科の技術分野を再編し、【情報・技術科（仮称）】として独立 情報教育を一層充実させ、プログラミングやデータ活用、計測・制御に関する学習を高度化するとともに、これらの知識や技能を活用しながら、ロボティクスやスマート農業、3D 設計（CAD）などについて、横断的・探究的に学ぶことが想定されています。

2 指導に当たって～教え込むのではなく「立ち止まらせる」～

AI や SNS の普及により、子どもたちは「一瞬で答えが出る」「ワンタップで情報が拡散する」という超高速な情報環境の中にいます。また、偽・誤情報の拡散や、フィルターバブル^{*1}、エコーチェンバー^{*2}といった価値観の偏りが生じやすい構造に注意する必要があります。このような時代において、求められる学校現場の指導は、知識を暗記させることや禁止ルールを一方的に「教え込む」ことではなく、子どもたちを意識的に「立ち止まらせる」アプローチです。

AI が答えを出すスピードを加速させる存在であるならば、教員の役割は「あえてブレーキをかけ、子どもを立ち止まらせて思考を深めさせる存在」へと変化することが必要です。

「情報の発信元（一次情報）は確かなか？」「別の見方や意見はあるかな？」といった教員の問いかけ＝「立ち止まりのしかけ」こそが、AI 時代をたくましく生きる子どもたちの思考力やメディアリテラシーを育む土台となります。日々の授業づくりにおいて、ぜひ子どもたちが「立ち止まる」瞬間を意識的にデザインしてみてください。子ども自身が多面的に考える習慣をつくること、見極める力の確実な育成につながります。



*1 インターネットを通じて見る情報が、自分の好きなものや興味あるものに限られてしまう状態

*2 SNS など自分と似た意見の人ばかりとつながった結果、自分と似た意見ばかりが返ってきて、みんな自分と同じ考えだと思い込んでしまう現象

安心して自分の考えを表現できる学級を目指す！

学びやすい教室をつくる学級経営講座

【開催期日】 8月6日（木）AM 小学校 PM 中学校

【会 場】 ユートピアくびき希望館

【主な研修の流れ】



① 上越教育大学 赤坂真二教授によるミニ講義

- ・温かい学級 → 誰ひとり傷つけない学級（そのためには秩序が大切→言いたいことが言える学級）
- ・授業づくり（主体的・対話的で深い学び）× 学級づくり（自治的集団）＝教育の質（往還して高め合う）
- ・学級経営は【縦糸】文化や伝統の尊重・秩序の確立と【横糸】教師と子ども、子ども同士の心の通い合いが絡み合って成立する。

② 上越教育大学 阿部隆幸教授によるミニ講義

- ・「管理のためのルール」から「行動規範としてのルール」へ（教師がいなくても自発的に行動できる）
- ・リレーション（関係づくり）では、多様な他者と信頼関係で結び付くよう仕組むことが大切
- ・安心な学級には「聴くコミュニケーション（傾聴）」が大切（自分の意見は言わず、相手の意見を聴く）

③ 実践発表

< 小学校 >

前田 考司 教諭（十日町市立川治小学校）
子どもが毎日書く「振り返りジャーナル」
（教師による短く簡潔なフィードバック）

詳しい研修資料や実践例をご覧になりたい方は、こちらからどうぞ



川住 亮平 教諭（高田西小学校）
九九リレー（座席の順番で一から九の段までを次々と唱えてタイムを縮める活動。最高記録は、なんと48秒！）

< 中学校 >

小林 弓理 教諭（大潟町中学校）
自治的集団を目指した「クラス会議」と
生徒同士のフィードバックとなる「日直活動」

高橋 淳一 教頭（城西中学校）
グループワークトレーニング（「神奈川 GWT」で検索）
毎日30秒～1分のペアトーク

④ 実践発表に関する質疑応答および赤坂教授・阿部教授からのコメント

各実践は、何のためにその活動を行うのか、意図や目的が明確です。活動の価値を子どもたちと共有し、学級の実態に合った実践を進めていくことが大切です。

⑤ 学年別グループでワークショップ（KPTシートを活用して話し合い及び共有）

Keep：成果が出ていて継続すること Problem：解決すべき課題 Try：具体的な改善策
各グループ熱心な話し合いが行われ、2学期に実践する具体的な改善策を出し合い、受講者全員で共有しました。

学習指導要領の総則では、学級経営の充実が「学習や生活の基盤」として明記されています。安心して自分の考えを表現できる学級を目指すことこそ授業改善の第一歩であり、確かな学力※の向上につながります。

※ 確かな学力＝知識＋使う力＋学び続ける力

（担当 教育センター 指導主事 長谷川）

教育センター研修紹介②



これからの社会で求められる人材を育てる
～キャリア教育の視点から学校づくり～

「今、社会で求められる人材とは?」「そのために学校教育の中で、子どもに身に付けさせたい資質・能力は?」…キャリア教育を切り口として、より充実した学校づくりに結び付けていくために、今回の研修会を設定しました。日々、変わりゆく現代社会において、「子どもが将来のために自ら磨きたいと考えている力」と「企業がこれからの社会を支えるために求めている力」をつなぐことが、私たち教職員の役目なのではないでしょうか。

今回、株式会社テラスカイ副社長の宮田隆司様を講師に招き、語っていただく中で、参加者が改めて「人づくり」の重要性を実感し、教育のあり方を捉え直す機会になりました。宮田様の講話では、まず、時代と共に進んできた「イノベーション」の歴史を辿る中で、企業の成長には「イノベーション」が必要不可欠であることが語られました。そのため、企業としては「イノベーション」を共に起こすポテンシャルをもった人材を望んでいることに私たちは気付かされました。具体的に企業が求める人材については、次のように示していただきました。

<企業が望む「イノベーション」のポテンシャルをもった人材の資質・能力>

- | | | |
|--------------------------|---|------------------------------------|
| ●分析力・課題抽出力 | } | 授業・学習などで身に付く |
| ●問題解決能力・指導力 | | |
| ●コミュニケーションスキル・受援力（巻き込む力） | } | 学校生活などで身に付く |
| ●協調性 | | |
| ●忍耐力・胆力 | } | 部活など課題・目標設定を明確にし
継続的に取り組む中で身に付く |
| ●情熱・意欲・モチベーション | | |

（出典：株式会社テラスカイ副社長 宮田隆司

「これからの社会に必要とされる人材育成を目指した学校づくり研修会」資料より）



<参加者から寄せられた声>

・企業が望む人材の資質・能力は、コミュニケーション力、協調性、忍耐力、意欲など学校で子どもに育てたい力と重なることを確認できた。子どもなりに自分が経営者だったらどんな人材を採用するか考えさせることで、将来のために今やることを考えさせたい。

・子どもを社会に送り出す側ではなく、受け入れる側の立場に自分を置くことで、新たな気付きや視点を得て実践への足掛かりを掴むきっかけとなった。

宮田様の講話は、プログラミング教育の位置付けや生成AIとの向き合い方にも話題が広がり、多角的な視点から学びの深まる研修となりました。今後も、様々な立場の方から語っていただき、違った角度から学校を見つめ直すことで、よりよい学校づくりの推進やキャリア教育をはじめとした教育活動の充実を図っていきたいと考えます。

（担当 学校教育課 指導主事 磯貝）

令和 8 年度夏期カウンセリング研修会

～ 講座の様子や参加者の感想を紹介します ～

BPS モデルに基づくケースアセスメントとケース会議の進め方

新潟県スクールカウンセラー 小林 東 臨床心理士



★生物、心理、社会の3つの側面から問題行動の背景にある原因を探るのは、本人が何に困っているのかを理解するために有効な方法だと感じました。

★ケース会議のシミュレーション演習を通して、講師の先生をはじめ多くの先生方のお考えを聞く機会となり、大変有意義な時間となりました。

困った行動の理解から前向きな行動・学習支援に向けて ～教室でできること～

新潟大学 村中 智彦 教授



★適宜ペアワークの場面を設けていただき自分なりの支援方法を考えながら主体的に参加できました。自分には苦手なこともあるけれど自分のことが好きだなと思える人間になってほしいです。

★「自分で自分を支えられる子ども」を育てるというお話が最も印象に残っています。子ども自身が「がんばった」「できるようになった」と実感できる関わり方をしていくことが大切だと感じました。

「誰一人取り残されないウェルビーイングの向上を目指した学級づくり」

～教育観のパラダイムシフトや特別活動の効果的活用を通して～

國學院大学 杉田 洋 教授

★子どもたちの心が動かされる「学校」という小さな社会が尊いと感じ、教師自身もその営みに参加し成長していく仲間でありたいと感じました。その「小さな社会」の力を信じたいと思いました。

★誰とでも話し合え、誰のどんな意見も大切にして話し合うことができる子どもたちの育成に、できることをやっていきたいと思いました。講演後、涙が止まらず興奮気味でした。



不登校についての新たな理解と支援 ～ポリヴェーガル理論とHSC～

真生会富山病院 明橋 大二 医師

★不登校の何割かはHSC*なのではないかという話にハッとさせられました。回復の4段階を頭に置いて、焦らず長い期間をかけて心も体も休養させる必要があることを学びました。

* Highly Sensitive Child(生まれつきの気質で、非常に敏感な子ども)

★根拠を説明しながら話をしてくださったので、とても納得しました。自分の実情にあった研修を受けることができ、お医者さんのお話を聞けることはとても貴重だと思いました。

